

## 第39回庭野平和賞 贈呈理由

庭野平和賞委員会は、第39回庭野平和賞を聖公会司祭(聖使修士会)のマイケル・ラプスレー師(ニュージーランド出身、南アフリカ共和国在住)に贈呈することを決定した。ラプスレー司祭は、アパルトヘイトをはじめとする南アフリカの社会的差別に正面から立ち向かい、解放運動を支援し、広く世界を舞台に、様々な平和構築活動を展開した。庭野平和賞の贈呈は、その功績を顕彰するものである。

宗教指導者であり世界的な社会活動家であるラプスレー司祭は、宗教界に対し地域に存在する差別に目を向け、問題を深く認識する必要性を訴え、世界中に蔓延する人種差別、アパルトヘイト、その他のあらゆる社会的差別に対抗する宗教者の力を結集した。ラプスレー司祭の社会改革活動において特筆すべきことは、その取り組みの対象を人種差別主義の基盤をなす経済や政治的側面のみに限定せず、社会的差別に起因する不正義がもたらした敵意、憎悪、その他の社会的・心理的影響に対処すべく、癒しのプロセスを強調した点にある。

マイケル・ラプスレー司祭は、1949年6月2日、ニュージーランド生まれ。白人に生まれたことで得られる安逸な生活を求めることがなく、自らの宗教的信条に従い聖職者の道に進む。1971年、聖使修士会に入会。1973年、オーストラリア聖公会の司祭に按手された。

同年、ラプスレー司祭は、アパルトヘイトのさなかにあった南アフリカ共和国に派遣され、ダーバンの大学チャップレンに任命された。そこで彼が目の当たりにしたのは、アパルトヘイト下で黒人学生が経験していた差別の実態と、学生たちによる解放闘争だった。銃で撃たれ、拘留され、拷問を受ける黒人学生たちのために、彼は声を挙げ、反アパルトヘイト運動に参加。そのため彼は、南アフリカから追放され、それを機に世界中を巡回しながら人種差別に反対する人々の意識を啓発し、反アパルトヘイト運動を支援する力を結集していった。1990年、ラプスレー司祭は、手紙に仕掛けられた爆弾によって両手と右目を失い、重度の火傷を負う。しかし、爆弾は彼に憎悪や諦めなどの感情をもたらしあしなかった。それどころか、この事件を機に、彼は日々の聖務を見直し、「自由の戦士」「反体制活動家」から「治癒者」への変容を果たす。そこには、非暴力による平和構築を進めるためには、「癒し」と「和解」が不可欠であることへの気づきがあった。

1993 年、マイケル・ラプスレー司祭は、「暴力と拷問の被害者のためのトラウマ治療センター」のチヤブレンに就任。1998 年には、ケープタウンに「記憶の癒し研究所」を設立した。以来、南アフリカのみならず世界各国で排外主義や難民への暴力に反対する地域フォーラム、受刑者を対象にしたワークショップ、青少年に対する人権教育を実施する一方、対話集会をはじめ、平和構築に向けた活動に参加するなど、研究所の諸活動を展開。彼が率いる「記憶の癒し」ワークショップは、不正義と差別に曝された人々に向けて、自らの体験を語り傾聴を求めることができる分かち合いの場を提供している。ラプスレー司祭の活動の特徴は、年齢、性別、人種、宗教の違いを超え、誰一人排除しないその包容性にある。

人種差別は南アフリカ一国の問題ではないという認識に立ち、ラプスレー司祭は、自らの活動を国内だけに留めず、米国の同時多発テロの犠牲者の家族らと共に「キューバの友人」や「国際平和ネットワーク」を設立するなど、国境を超えて有効で非暴力的な手段によるテロ対策活動を展開している。

ラプスレー司祭の靈性の源泉は、自らのまわりで目撃した社会的不平等に起因する不正義、苦痛、苦難への洞察にある。その靈性は、聖書の理解に基づき、すべての人が正義を得られる社会の探求へと彼を導いた。それゆえ彼の言葉は、キリスト教に基づきながらも普遍的であり、あらゆる宗教に通底する響きを持つ。対話と和解、そして正義の回復に向けたアプローチを基盤に、非暴力かつ諸宗教に通ずる平和構築の努力と癒しの活動を続けることで、ラプスレー司祭は、南アフリカ国民のみならず世界中の多くの人々に癒しを提供している。

以上のように、ラプスレー司祭は、平和構築と宗教協力の推進に多大な貢献を果たしており、その活動は庭野平和賞の使命と軌を一にするものである。

庭野平和賞委員会 委員長

ランジヤナ・ムコパディヤーや